

第十五回国際仏教学会報告

望 月 海 慧

はじめに 平成二〇年六月にアメリカのアトランタにあるエモリー大学で開催された第十五回国際仏教学会に参加した。ローザンヌ大、チュラロンコン大、ロンドン大に続いての四回目の参加である。前回に引き続き、友人のジョナサン・シルク教授（ライデン大）による「大乘經典」のパネルでの発表となった。当初は科学研究費の助成研究の関係からトルポバの大中観思想に関する発表を考えていたのだが、前年の師走に教授からこのパネルへの参加を誘っていたいたので、予定を変更し、前回の落穂拾いとして『修習次第経集』に関する研究発表の意向を伝えた。すると、すぐに教授より発表に利用するようにと、同論に対する詳細な研究データが届いた。こ

れでは、この研究については個人で発表すべきものとは思われないので、いずれ共同研究の形で発表することを考え、翌年の「国際サンスクリット学会」のために用意していたレジメを提出することにした。前回のロンドンでの同パネルの発表はあまり満足のいくものではなく、教授に申し訳ない思いを引きずっていたのだが、今回のものは仏教学だけでなくインドの数学やチベット語の言語学においても貴重な情報を提供できるものと思われる。そのようなものを次に取っておくなどという消極的態度を反省し、次なる機会にはさらなる成果を用意すべきであると自覚した。もちろん今回の発表については、時間をかけた研究の結果というのではなく、たまたま重要

な情報に出会ったというだけのものではないのである。

アトランタは、筆者にとつての初めてのアメリカ南部体験である。中学生の頃に観たアーサー・ヘイリー原作のテレビ・ドラマの『ルーツ』や、ヴィヴィアン・リー主演の『風とともに去りぬ』を思い出しつつ、ボブ・ディランの『ナッシュヴィル・スカイライン』やジム・ジャームッシュの『ミステリー・トレイン』、アラン・パーカーの『ミシシッピー・バーニング』などのことを考えると、車を借りてアメリカ南部に諸都市に足を伸ばしたいと思うのだが、本務校の授業期間中なので最短の滞在しかできず、アトランタのみの訪問となる。

前回のアメリカは、二〇〇〇年に東海岸のタコマにあるパシフィック・ルーテル大学において開催された第六回仏教・キリスト教研究会の「仏教とグローバル・ヒーリング」会議であった。観光気分で出かけ、「仏教思想は環境問題に効果的作用をもたらすのか」という発表を用意していったものの、聴衆もほとんどおらず、アウェ

イのゲームに参加して散々な結果になってしまった感じであった。今ではベルナルド・ベルトリッチの『リトル・ブッダ』の舞台になったシアトルのチベット寺院やワシントン大学の訪問とか、他の重要な成果を求めることを考えそうなものであるが、オリンピック公園まで車を飛ばし、霧の太平洋で遙か遠くの日本を思いながら傷心を癒した。ロック・バンドのニルバーナの拠点であった街から逃げるように隣国のバンクーバーに走って行った思い出しかないのである。この敗北の記憶をどうにか払拭したいと思いつながら身延の地を発った。

六月二三日 トランジットのデトロイト空港は、二〇〇四年の第六回国際法華経学会参加のためにトロントに出かける際以来である。着陸したものの、機体はなかなかターミナルに移動せず、空港でのトラブルが予想される。一時間ほどの待機の後に、やっと機外に出ることができたが、続く入管の行列を見ると、乗り継ぎ便が多少心配

になる。荷物を拾ったあとも、チェックイン・カウンターの行列である。もう離陸時間であるが、この状況ではすべての便が遅れていそうなので、あまり気にならない。前回と同じ地下通路を移動したターミナルでは、乗り継ぎ便が待っていてくれた。

九〇分程のフライトでハーツフィールド・アトランタ国際空港に到着。地下鉄で空港の出口に向かうと、バグゲージ・クレームは空港の出口にあり、さすがに南部だなどと思う。タクシーに乗り宿舎に向かうと、デュアン・オールマンによる「ホット・アトランタ」のリフが頭の中で鳴り響いてくる。ターナー・フィールドの前を通り、市内をかすめてエモリー大学の敷地内に入るのだが、街の中心を離れていることから今後の公共交通機関による移動に心配を感じてしまう。

ウッドラフ・レジデンスのホールにてレジストレーションをして、部屋に入る。寮の部屋は二人用の部屋であり、それぞれのベッドと筆筒が備え付けられ、バス・ルーム



ウッドラフ・レジデンスの部屋

第十五回国際仏教学会報告（望月）

は隣の部屋と共同である。疲れており、夕食に出かける気にもなれず、部屋に用意された果物と菓子、飛行機から持ってきたパンを食べ、すぐに寝てしまう。

六月二四日 まだ暗いうちから目が覚めてしまい、日本印度学佛教学会発表のためのトルポパの『宝性論注』を読む。今回の発表は前年に日本宗教学会で行ったものの英語版なので、前回のようにロンドンに到着してから毎早朝の二時間を用いて発表原稿を仕上げるというような心配はないが、帰国後の次の学会の準備の方が心配である。

学会はすでに前日に始まっており、朝食を取るために指定された構内のボール・ルームに向かうと、食事を終えた佐久間秀範先生（筑波大学）に出会う。先生とは前月のソウルでの第四回韓国仏教学結集大会でも一緒におり、最初に出会ったのが普段から親しくさせていただいている先生なので、とりあえず安心する。学会期間の食



食堂のあるコックス・ホール

事については、学会参加費に含まれている。食事はビュッフェ・スタイルで、紙のプレートにサラダとメイン・ディッシュとデザートを選び取る形態である。食後に学会会場となる建物に移動し、レジストレーションを行う。何名かの知己のある学者と会々と、ホーム・ゲームを行うような安心感を得ることができる。

学会二日目である本日より、各パネル・セクションの発表が行われる。午前中に設けられたパネルはチャールズ・プレビッシュによる「北米における仏教研究の学術的学習法」、ジョン・マクリーとエリック・ゴッデルによる「中国仏教の瞑想修行と禪」、バスカル・ユーゴーと加納和雄とケビン・ヴォースによる「十一・十二世紀におけるチベットの学問主義」、タラ・ドイルとデイヴィッド・ギリーによる「人類の要求とポスト植民地主義の枠組み——ブッダガヤにおける学術会議」であり、これに「初期仏教」、「ヒマラヤ仏教」、「テキスト・文献学的研究」のセクションが加えられている。

第十五回国際仏教学会報告（望月）

このうち「十一・十二世紀におけるチベットの学問主義」に出席する。各発表は、次の通りである。

バスカル・ユーゴー「チャパ・チューキー・センゲーの認識論における定義の理論とその機能の起源」
ジョナサン・シュトルツ「チャパによる vid dpyod と rtog pa の間の論争的類推」

ドルジ・ワンチュック「シャーンタラクシタの『中観莊嚴論』に対するチャパ・チューキ・センゲの注釈——予備的評価」

ケヴィン・ヴォース「初期カダム派によるシャーンティデーヴァの『入菩提行論』の解釈」

加納和雄「仏性論に関するゴク翻訳官の教義的位置と初期カダム派論師たちへの衝撃」

いずれもカダム派全書に基づく研究であり、カダム派の祖師とされるアティシャを研究する筆者には注目すべ

きパネルである。同全書についてはパネラーの加納氏「ゴク・ロデンシェーラプ著『書簡・甘露の滴』」『高野山大学密教文化研究所紀要』第二〇号、二〇〇七年）により詳細な報告がなされているが、それらの中から今回選ばれた文献が『中観莊嚴論』と『入菩提行論』の中観文献に対する注釈書から如来藏思想、さらには論理学まであり、カダム派文献のヴァリエーションの豊富さがわかる。

午後に設けられたパネルは、「インド仏教のメタ倫理」、アイアル・アヴィヴとジェイソン・クローワーによる「二十世紀の中国における仏教の学問主義の再生」、パスカル・ユーゴーらによる「十一・十二世紀におけるチベットの学問主義二」、タラ・ドイルらによる「人類の要求とポスト植民地主義の枠組み二―ブッダガヤにおける学術会議」であり、これに「仏教と西洋」、「物語研究」、「金剛乗仏教」のセッションが加えられている。

このうち、午後も同じパネルに参加する。各発表は、

次の通りである。

ジョージ・ドレフス「チベットの懐疑論者？ パ

ツァブのプラーサンギ思想の予備的分析」

吉水千鶴子「シャントタン・サグパの中観の主張命題
(*pratiñā, dam bca*) の用例と否認について」

オルナ・アルモーギ「ロンソム・チューキサンポに
よる中観思想の細分析」

ナサニエル・リッチ「ロンソム・チューキサンポ
『弁証法 (*mishan nyid*)』と『真言 (*gsang snyags*)』
と『見 (*lta ba*)』について」

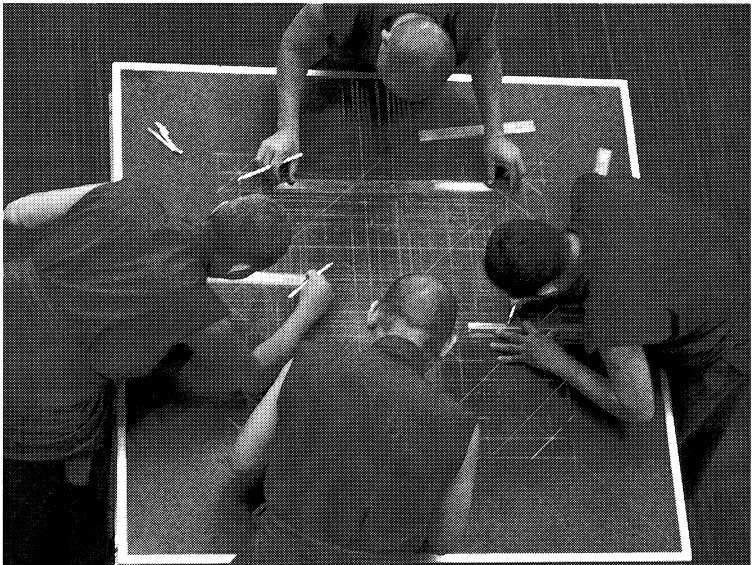
ハイデルーン・キュベル「ロンソム・チューキサン
ポの大瑜伽と中観について」

これまではチベット仏教研究の主流はツォンカパなどの
所謂メジャーな論師の研究であったが、研究のトレンド
がその他の論師に移っていくことを感じた。チベット仏

教における思想的解釈の流れが解明されることになり、チベット仏教思想研究の重要な基盤となるものである。

パネル終了後、チベット僧による砂マンダラ作成開始のための儀礼を見学する。初めて目の当たりにする儀礼であるが、マンダラ作成が幾何学的に計算されたものであることを再認識した。以前に記したことがあるが、僧院が果たしていた役割は仏教という特定の宗教の教義の研究だけでなく、美学・医学・建築学・言語学などの総合的学問領域も含んでおり、現代の総合大学と同じ役割を担っていたと思われる。そのような学問大系に支えられて、この砂マンダラのシステムも確立されたのである。

夕食のことを考えながら寮に向かうと、交差点でまたまタクシーがとまるので、それに乗り市内に走る。このようなことは亀の浮木の喩例ほど稀であるということに後に実感することになるのだが、ダウンタウンのファイブ・ポイントで降りてもらう。大都会の繁華街とい



幾何学的な砂マンダラ作成法

うことを期待していたのだが、平日の夕方とのこともあり、閑散とした地方都市のイメージである。金箔を貼ったドームが夕日に輝いているジョージア州議事堂の写真を撮り、ダウンタウンの中心であるショッピング・モールのアンダーグラウンドに戻る。子供のお土産を買わなければとも思うが、夜も店を開いているアジア諸国とは異なり、その多くが閉店をしているので、アメリカ文化的の象徴の一つでもあるコークとハンバーガーの夕食を取り、タクシーにて寮に戻る。

六月二五日 この日も早朝から目が覚め、『宝性論注』を読む。八時に寮を出て、大学構内で朝食を取り、学会会場に向かうというルーティーンは連日同じである。午前中に設けられたパネルはジャン・ヴェスターホフとジェイ・ガールフィールドによる「仏教思想の分析と進展——インドとチベットにおける二諦説」、ピーター・スキリングによる「どのようなようにして上座部は上座部なのか——」



ダウン・タウンのアンダー・グラウンド入口

デイヴィッド・フィオダレスによる「仏教における奇跡と超能力」であり、これに「仏教美術」、「仏教における現代的発展」、「解釈学・学問主義・注釈技術」、「律研究」のセクションが加えられる。

このうち、午前中の前半は「仏教思想の分析と進展——インドとチベットにおける二諦説」のパネルに出席する。各発表は、次の通りである。

トム・ティルマンス「どれくらいしたら中観仏教は世俗諦を修正できるのだろうか」

ダン・ルストハウス「瑜伽行思想における二諦の用例と意味」

ジェームス・ブルームエンタール「シャーンタラクシタの二諦説叙述に対する動的様相」

二諦説については、勝義諦よりも世俗諦の解釈に重点が置かれているように思えるのだが、インド・チベットの

学者がこれをどのように理解していたのかはとても興味深い論点である。このパネルの後半には、さらに次の発表が続く。

ソナム・タクチェ「チャンドラキールティの二諦説と論理学——チャンドラキールティの立場を解釈するチベットの二種の在り方」

ダン・アーノルド「仏教思想の分析と発展に対する応答」

これらも興味深いものであるのだが、建物を移動して「解釈学・学問主義・注釈技術」のセクションに参加する。

ウェイ・シャーン「ハイデッガーの存在論的解釈学との対話における華嚴仏教の解釈学的戦略」

ロバート・サーマン「テンギルを翻訳する——ロル

ウェイ・ドルジからの手助け」

前者のような発表は、正直に言って、あまり興味がないものである。西洋哲学と仏敎思想を比較することあまり意味を感じておらず、そのような発表の多くは客観的事実よりも個人の主観的な解釈に基づくものが多いからである。仏敎学者が行う比較思想の方法論は、小谷野敦が比較文学の方法論を批判するように、客観的な実証主義に耐えられないものが多いように思われる。湯山明による東洋学の研究史を実証的に論証することが、仏敎学研究における比較思想の手法のよい実例となる。

それよりも、次のロバート・サーマンの発表のための座席を確保することが目的であった。個人的には彼のチベット学の研究成果よりもユマ・サーマンの方に興味があるのだが、部屋が満室になるその人氣が彼女並であることに少し驚いた。今回の学会では、チベット学の分野では、他に多くの優れた研究成果が報告されているのだ

が、それらはあくまでもミクロな専門的領域のものになってしまっており、専門領域外の学者の興味を引かないであろう。それよりも一般的に名の知られた学者の発表が人氣を集めることになるが、私個人の研究に有益な情報は得られなかった。心の中では出国前に読んでいた彼の *Why the Dalai Lama Matters?* がとても面白い本だったので翻訳権を欲しいと思っていたのだが、同書は年末に鷲尾翠訳により『なぜダライ・ラマは重要なのか』（講談社、二〇〇八年）として出版された。

午後に設けられたパネルは、ジャン・ヴェスターホフらによる「仏敎思想の分析と進展——インドとチベットにおける二諦説」、トレント・ポムプレンによる「イポリット・デジデリ（一六八四—一七三三）の著作における仏敎」、ピーター・スキリングによる「どのようにして上座部は上座部なのか二」、ララ・ブライトスタインとロジャー・ジャクソンによる「マハームドラー——大印契に接近する」、アンディー・ロットマンによる「アヴァ

ダーナ文献の新しい調査」であり、これに「敦煌」と「インド・チベット仏教思想」のセクションが加えられている。

そのうち、午後は「インド・チベット仏教思想」のセクションに参加する。各発表は、次の通りである。

エヴィーター・シュルマン「『六十頌如理論』と『空性七十論』から見てナーガールジュナを読む」
アン・マクドナルド「『根本中頌』に対するレンダーワの注釈書」

アンドリュウ・マクガリティ「なぜ我は鳴きガラスのようではないのか？ — アーリヤ・デーヴァの『四百論』における見落とされた議論とそれがチベット仏教の伝統的教義にもたらしたかもしれない洞察」

ブラモード・クマール「仏教論理学の意味論的面—ディグナーガとダルマキールティへの特別な言及」

第十五回国際仏教学会報告（望月）

アルビオン・バターズ「すべては心の中—ゾクチェンと唯識の間の類似性に対するロンチェンパの論駁」

クリスチャン・チョセル「仏教認識論に市民権を与える」

これらの発表は、インド仏教の中観と唯識、並びに論理学の領域を扱うものであるが、インド仏教思想史を考察する際にも、チベットの論者たちの視点が非常に重要な論点を提示するものになりうることがわかる。もちろんチベット仏教の見方にとらわれすぎるのも問題であるが、チベット仏教文献はインド仏教思想の解明の補助的資料ともなりうるものでもある。

連日レジデンスと学会会場との往復でアトラクタを観ずに帰国してしまうことになりそうなので、途中で退席し市内観光に向かうことにする。しかし地元の公共交通機関を把握せずに、市内に出ることがこんなに大変なこ

とだとは予想していなかった。まず大通りに出るが、タクシーの空車は全くつかまらない。しばらく模索したのち、どこかの施設に移動することを考え歩いていると、迎車のタクシーのドライバーが拾ってくれた。近くの病院に向かう途中、もう一人を救出した上で、携帯電話で別のタクシーを呼んでくれた。

彼に再度助けられることになるとは思ってもせずに、車を乗り換えてアトランタの最大の名所「ザ・ワールド・オブ・コカコーラ」を訪れる。宿泊先のウッドラフ・レジデンス、エモリー大学だけでなく、アトランタがコカコーラにより成立していることをこの地を訪れて初めて知ることになる。それ故にアメリカでのオリンピックをこのコカコーラの総本山で開催した理由も認識するのだが、半年後に同社の国内のマーケティング部の副社長が日蓮宗の総本山にある自坊を訪れることになる。予想もしなかった。同社が手がける世界中の製品を試飲できるコーナーは、子供がいたら楽しんだであろうと思

いながら、個人的には世界各国のテレビ・コマーシャルの映像を楽しむことができた。日本でも同社のコマーシャル映像がDVDで販売され、話題になったが、メディア論の観点だけでなく、文化人類学的視点からも興味深いものであった。

『地球の歩き方』によるとアトランタの第二の名所が、その隣にあるジョージア水族館である。全米最大の水族館ということで、学会発表申し込みの際のウェブ上のサイトではエクスカーションにもあげられており、秘かに楽しみにしていた場所でもあった。アメリカン・サイズは日本国内のものよりも大きいものであるという根拠のない期待をもっていたのである。確かに大きな水槽があったが、国内の有名水族館と比べると、わざわざこのためにアトランタに行くべきという程のものでもなかった。

残り少ない自由時間を満喫したいと思うが、CNNセンターは見学ツアーの時間が終わっており、もう一つの

アメリカ文化であるメジャー・リーグを観ておこうと思った。セントニアル・オリンピックの噴水脇にあるインフォメーションでゲームの時間を確認すると、当日は試合日とのことである。まだ時間があるので、ピーチツリー・センターに行き書店等で時間をつぶす。ビジネス街のモールののだが、それほど大きなものではなく、アメリカ南部最大の商業都市の規模を再認識することになる。

ウッドラフ公園で翌日の原稿を読み直したところで、タクシーを拾いターナー・フィールドに向かう。ところが着いた先は閑散としており、ゲートは閉ざされていた。日本を発つ前に正しい情報を得ておけばと反省する。

夕食の場所のことを考え、ガイドブックに新登場のニュータウンとあるミッドタウンに移動してもらう。工場跡地に映画館やショッピング・モールが設けられた地はお洒落なレストランなどもあるものの、疲れてしまい、結局はスーパードマーケットで食事を買って、タクシーで寮に戻ることにした。授業をサポートして当てもなく東京の繁



ロック・アウトされたターナー・フィールド

華街をフラフラしただけで何もせずに帰宅した十代の頃のような、悲しい時間であった。

六月二六日 いよいよ自身の発表日である。午前に設けられたパネルは、ジャン・ヴェスターホフらによる「仏教思想の分析と進展——インドとチベットにおける二諦説」、エスター・マリア・グッゲンモスによる「所謂人間仏教の単純構造を越えて——二十世紀の中国・台湾仏教の現代性の再解釈」、キャメロン・デイヴィッド・ワナーによる「仏教の記念像と建築」、ジョナサン・シルクによる「大乘仏教」、ブライアン・ブラックによる「初期仏教文献におけるバラモンとバラモン教の再提示」、ジェフリー・サミュエルとロバート・メイヤーによる「仏教における治癒・薬・長命の理論と実践」、これに「民族誌研究」のセッションが加えられる。

午前中は、もちろん筆者も参加するジョナサン・シルク「大乘仏教」のパネルに出席。少し遅れて行くとホー

ルは満室で、通路に座る。残念ながらこの数はトリを勤める私の時には半減してしまう。各発表は、次の通りである。

ヨーゼフ・ワルサー「大乘とは一体何か」

ジャン・ナティエ「経典になる——どのように大乘文献は始まったのか」

ジョナサン・シルク「大乘経典間の原典性——『迦葉品』の事例」

堀内俊郎「大乘仏教の権威の証明に関する所見——声聞衆と大乘の議論」

エリザ・レジッティモ「所謂大乘経典における保守的逆流」

望月海慧「『華嚴経』『阿僧祇品』と『入法界品』における算法について」

このパネルは、前述のように前回のロンドン大会からの



学会発表を行ったホワイト・ホール

続きである。インド仏教史の中で大乘經典をとらえなおすシルク教授の視点は大変重要なものであり、従来の東アジア仏教的視点によるものに再考をうながすものとなる。私の発表の内容は、①ラトナーカラシャーンティの『経集釈』にはインドの算法に関する記述がある、②そこでは桁数を二種に分類している、③そこに引用される『華嚴經』の記述によりインド数学における最大数が確定される、④『翻訳名義大集』にみられる同経に基づく桁数のデータは同経のチベット訳のものとは異なっており、『華嚴經』の旧訳の存在の可能性もあるというものである。この発表については、ブラールビック教授（オスロ大学）から好意的なコメントを頂き、有り難かった。教授はローザンヌ大での本学会の際に電車の中でお会いしたのが最初だが、その時の私の発表レジュメをスコイエン・コレクションの第一巻所収の論文で紹介していただいております、大変に感謝している。また松田和信先生（仏教大学）には、『俱舍論釈』における引用經典に関して、

“muktakesūtra”の語を従来の研究に従い固有名詞として理解していた点を、「（大蔵経から）抜け落ちた經典」を意味するとの指摘をいただいた。この引用のアイデンティファイが困難だったのはまさにこの言葉がすでに示していたわけで、大変に有益な指摘であった。

午後は、学会で用意されたエクスカージョンである。選択肢は、アトランタ植物園、ハイ美術館、キング・センターである。コカコーラとCNNが現在のアトランタを代表するものならば、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアはアトランタが生んだ偉人なので、キング・センターを選ぶ。昼食後、キャンパス内からバスで移動するが、やはり人気のコースとなり、一台のバスでは間に合わない。三〇分弱で、キング・センターに到着する。ビクターセンターにおいてキング牧師の業績を確認するのだが、彼の暗殺が四〇年であり、アメリカにおける黒人の公民権の問題がそんなに昔ではなかったことをあらためて認識する。続いて佐久間先生とキング牧師の生家



再現されたマーティン・ルーサー・キング・ジュニアの生家

に向かう。前を歩いていった人たちが生家の中に入っていくことを確認し、扉を開けようとすると、鍵が閉まっている。さらに開けようと試みると、中から開けてくれた。中に入るためには、あらかじめビクターセンターでチケットの配布を受けて、ツアーでの見学となるようである。佐久間先生の機転のおかげで、前のグループのツアーに入れてもらえることになった。その後、牧師の資料が展示されているフリーダム・ホール、彼の父が牧師をしていたエベニザー・バプティスト教会（内部に入ることは不可）を見学し、バスにて大学に戻る。

とりあえず寮に戻り休憩の後、夕食に大学に向かう。その後再び寮に戻り、『宝性論釈』を読み時間を潰した後、ウィズダム出版社主催のパーティに参加する。寮と大学の間の往復を何度も繰り返し疲れてしまうが、各国の学者と出会うことができ、楽しい時間をすごした。

六月二十七日 一日早く帰国しなければならず、個人的に

第十五回国際仏教学会報告（望月）

は学会最終日である。午前に設けられたパネルは、フダヤ・カンダージャヤによる「国際的見地でのボロブドゥール」、パッタラトーン・チラプラヴァティとジャスティン・マクダニエルによる「仏教の葬送文化―芸術・テキスト・儀礼・パフォーマンス―」、リチャード・サロモンによる「ガンダーラ写本とガンダーラ仏教」、クラウス・ディーター・マテスによる「インド・チベット仏教における中観と唯識の真理のモデル」、チャールズ・ミュラーによる「元曉（六一七―六八六）と彼の比較仏教思想のヴィジョン」、デイヴィッド・グレイとクリスチャン・ウェデメヤーによる「インド密教における『芸術の立場』」であり、これに「南アジア仏教」のセクションが加えられている。

このうち、午前はクラウス・ディーター・マテスによる「インド・チベット仏教における中観と唯識の真理のモデル」に出席する。各発表は、次の通りである。

ホセ・キャベソン「論客としてのトルポパー『見分別意闡除去論』(Lia bai shan 'byed yid kyi mun so)』に関する論評」

トーマス・ドクター「明白な智慧の方法を求めて—マチャ・チャンチュプ・ツォンドウの中観計画」
ダグラス・ダッグワース「プラーサンギカと瑜伽行派を通してのミパンの中道」

ヤロスラフ・コマロフスキー「せり合いながら両立すること—ラトナーカラシャーンティとシャーキャ・チョクデンとチュータック・ギャムツォとミパンの中観と瑜伽行の両立性の問題に関して」

檀殿伴子「他空・大中観説に関するカトック・ゲツェ・ミパンの見解」

このパネルは、現在の筆者の科学研究費助成による「チベット仏教における『大中観』思想に関する研究」に全く対応するものであり、個人的にとっても重要な発表

が並んでいただけでなく、このパネルに自分が加わっていないことを悔やんでしまうようなものであった。特に後半の発表では、筆者が指摘するインド仏教後期における中観と瑜伽行の融合の実例がチベット仏教にも影響を及ぼしていることが報告されている。

午後後に設けられたパネルは、パッタラトーン・チラブ・ラヴァティらによる「仏教の葬送文化—芸術・テキスト・儀礼・パフォーマンス二」、リチャード・サロモンによる「ガンダーラ写本とガンダーラ仏教二」、シェイン・クラークによる「仏教におけるユーモア」、クラウス・ディーター・マテスによる「インド・チベット仏教における中観と唯識の真理のモデル二」であり、これに「仏教の精神と瞑想の理論」、「東アジア仏教」、「論理学と認識論」のセッションが加えられている。

このうち、午後も同じパネルに参加する。各発表は、次の通りである。

デイヴィッド・ヒギンズ「ロンチェン・ラブジャン
パの二元論的心 (sems) と原初的認識 (ye shes)
の区別について」

クラウス・ディーター・マテス「カルマパ第三世ラ
ンチュン・ドルジェ (1284-1339) は他空説の擁
護者だったのか? — ジェ・タシ・ウーセル
(15th/16th century) の著書からのさらなる文
献資料」

斎藤明「中観派の意味と始まり」

高橋晃一「所謂「瑜伽行派」の意味と自己認識につ
いて」

ツェリン・ワンチュク「トルポバ・シェーラブ・ゲ
ルツェンの著書における唯識派と中観派間の差異
の区分」

午前に引き続き、ここでも筆者の現在の研究内容に対応
するトルポバや他空説に関する発表がある。今回の学会

第十五回国際仏教学会報告(望月)



完成が近づく砂マンダラ

では、チベット仏教の本流であるゲルク派やツォンカパの研究よりも、カダム派やチヨナン派のトルポパのものが多いのはパネリストの影響もあるであろうが、チベット仏教研究が次の段階に移っていることを意味しているように思える。

発表終了後、エモリー・コンファレンス・センター・ホテルにてフエアウエル・ディナーが開かれた。レジデンスに荷物を置いて、徒歩でホテルに向かう。ビュッフェ・スタイルの料理で、最後の夜を楽しんだ。国際学会では、発表よりも、ウエルカムのカクテル・レセプション、発表の合間のカフェ・ブレイク、毎日のランチ、そして最後のフエアウエル・ディナーも大切なイベントである。今回、それらを有効に利用できたかと言うと、反省ばかりである。

六月二八日 最終日の午前に設けられたパネルは、ブリジット・ケルナーによる「仏教の自証の理論―解釈と批

判」、マリコ・ナンバ・ワルターによる「先駆的翻訳者と伝道者と彼らの伝えたテキスト」、アンドリュウ・クウィットマンとサラ・ヤコビーによる「チベット人の自伝・伝記の再調査」、ヨゼフ・ローガンによる「宗教・哲学体系としての新たな法華經の独創性の蘇生」であり、これに「東アジア仏教思想」、「東南アジア・内陸アジア・韓国・モンゴル仏教」、「テクノロジーと資源」のセクションが加えられている。

午後に設けられたパネルは、マーク・デニスによる「仏教の注釈の伝統―仏教の知的歴史における論証性の越境とテキストの作成」、チャールズ・オルチェックによる「東アジアにおける秘密仏教の側面とタントラ」、ライ・ミラー・サングスターとロバート・バーネットとローラ・ハリントンによる「チベットとチベット仏教における「現代」の使用と誤用」、タオ・ジャンによる「瑜伽行仏教―研究方法」、アニ・クンガ・チョドウンによる「シャーンティデーヴァと『菩薩行論』」であり、

これに「大乘仏教」のセクションが加わっている。

最終日はこれらの発表がまだあるものの、月曜日の授業のために帰路につかなければならない。連日の時差ばかりにより早くから目が覚めたために、寝過ぎすることもなかった。空港までのタクシーの手配を考え、レジデンスの廊下にある電話の使用も考えたのだが、とりあえず通りにでてみる。するとタクシーが向かって来るので、手をあげてみると、なんと数日前に市内へのタクシーを手配してくれたドライバーである。「またお前かよ」と言われながら、彼の迎車に相乗りさせてもらうことになり、部屋の鍵を戻しに行く。しかしながらポストになかなか入らず、たまたま居合わせた桂紹隆先生にお手数をかけてしまうものの、何とか空港に向かい、朝食をとる。

帰路はミネアポリス経由である。デトロイトよりも距離があるはずのこの地への到着予定時間が短いことを気にもせずフライトを楽しんでいると、私の時計では一時間遅れで到着である。エンジン全開で駐機場にいかない

かなどと思いながら飛行機を降り、乗り継ぎ便の出発ゲートに走って向かうと、そこにあった時計は一時間遅れであった。アトラントとは、一時間の時差があったのである。一七年前はここからマイアミ、ナッソーへ飛んだことを思い出しながら、ピザを食べて時間を過ごす。ここで留守番の家族にお土産をとも考えていたが、何もなくてアメリカの駄菓子ですましてしまい、使う機会もなかった米ドル紙幣を残したまま帰国便の機中に入る。

まとめ 今回で四回目の国際仏教学会であるが、反省すべきことばかりであった。発表内容については、国内の日本宗教学会ですでに発表したものであるが、さらに海外でも発表すべきものであるという自負があった。『翻訳名義大集』に拾われた語彙とチベット大蔵経の翻訳テキストの間には修正が行われていること、あるいはインド数学における最大数の確定など貴重な発見を提示できたと思う。もちろんインド仏教におけるアンソロジー文

献を研究している立場としては、この発表は成功であった。しかしながらチベット仏教を研究している立場としては、それらのパネルに参加していなかったことは大変に残念である。前回のロンドン大学での学会では辛嶋静志先生が複数回の発表をしていたことを思い出すと、今回の学会ではトルポパの『二諦陽光論』に関する発表も行うべきであったと思う。

また今回の学会の全体的印象としては、チベット仏教に関する欧米の研究成果の進展を十分に認識した。我が国のチベット学研究も決して欧米に劣るものではないが、組織的研究の必要性も実感した。この点については、数年前に友人の伏見英俊先生（関西大学）よりご指摘いただき、*Acta Tibetica et Buddhica* の創刊に至ったのであるが、その編集内容も考える必要性を感じた。

最後に、本稿が、学会の報告というよりも、筆者のアメリカ南部珍道中記となっていることをご容赦願いたい。学術的報告については他の研究者によりなされと思う

れるので、ここではあくまでもパーソナルな学会参加報告を記したまでである。なお、本報告の外国人研究者名前の表記については筆者の推定でしかないので、本来の発音を誤って記しているものがあると思われる。詳しいプログラムについては、学会のホーム・ページ (<http://www.religion.emory.edu/iabs2008>) も参照していただきたい。なお、次の第十六回大会は台北にある法鼓山仏教学院において二〇一一年六月二〇―二五日に開催される予定である。